嵩山紀談

三

購入日
種別番號
函番號
日付
號
種別
號
9195
338
Vol-3

滋賀縣立學校藏書印

常山紀談巻之三目次

一 中嶋元行が母備中經山城をもらる事
一 石川數正浅岡某に鞨の緒を結び様を習ふ事
一 東照宮三河國一宮城御後巻の事
一 三好松永光源院義輝朝たを弑する事
一 三好実休戦死の事 附 光忠の刀の事
一 浦兵部功名の事
一 中村新兵衛永原安藝守一騎打の事
一 北條綱成地黄八幡の旗を捨る事
一 柴田勝家水缸を破て城を守る事
一 勝家先陣の殿となる事

一 坪内某料理の事
一 大沢左衛門が手の者ども 東照宮を窺ひ奉る事
一 清洲にて 東照宮信長公御對面の事
一 信長公伊勢に國司を亡ぼす事
一 大久保忠隣功名の事
一 高木主水村越与三左衛門後殿の事
一 太田下野識鑒の事
一 北条丹後指物の事
一 浅井長政齋藤龍興と軍の事
一 九毛兵庫助軍配の事
一 馬場美濃守今河の敵を焼く事
一 大友義鎮肥前國退口の事
一 信長公 東照宮小為朝の鏃を進らせられ事
一 姉川合戦の事
一 同榊原二の子功名に事
一 三井角右衛門生涯平右衛門功名穿鑿の事
一 金松弥五左衛門物見の事
一 信長公朝倉を撃ちひ事
一 長野信濃守上野國箕輪城を守る事
一 箕形原合戦に事
一 同信玄遠謀の事
一 同 東照宮御退口に事

常山紀談卷之三

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀後ゟ兵二万をとゝく備中
經山の城を攻させ給ふ此城ハ中鴻加賀ちゞ子大炊助元行ゞ
然なり元行僅ふ二百計の兵をれ共ちゝと恐まゞ頓宮
次郎左衛門尉九郎二郎ゟ百姓ゞ二百人をゝて寺屋敷と
ゝ地ゝ伏おき阿弥左衛門二郎五郎場ハ鬼ケ城とゝ
ゝかゝ墨ゝり敵侮ゝちゝゝ時門を開く打て出相図
乃貝をふけバ鬼ケ城の伏兵後ゟまハり又頓宮ホ百姓ゝ
帝旗を立さ竹鎗拵もゝせ関のゝをあぐゝ尼子ゞ家
兵左前後ゟ敵有ゝて助け合んとせまゞ道細く谷深、

なぶりまぶりてみだれたりさんざも攻具を設やうかこみしに
元行が母物の具付上に羽打を忘刀を授さへ女房二十人計
わたし元行本丸にある時八毋出丸を巡り元行出丸を巡まば毋
本丸をかりて士卒の怠を戒む或夜風雨甚しうふれば元行
百人計にて表討に出半を忍て伏置さうかくて乱まに入岡
部声をあげ火をかけ静かに引退る敵追来まばひ
れよ〳〵ぬ径のかくれより伏兵どつと起かけて敵三百餘うち取
さう元行も防ぎれく尼子は軍引退て復攻る事なし
○あるう
○東照宮今川氏を伐不快の事起る時勇て後ろに軍陣
三郎君とぐ先おせうひしを生害すべきうつ西石川伯耆守
数正此由申ていとけなきを伐身の失ましたるを伐仏錯
侍ふ人なりしに事をて口惜られしく数正の所向く冥途の供
をして年〳〵めをて唯一人駿府にもしかくれる今川家れ
侍大将朽屋が子二人生どれ氏真なりきうと家とうの
伐外祖関口刑部大輔と相なり若君なりせ戸りんを弱
殿が子尼〳〵せんと尋む氏を悦てやどて若君をとて
年〳〵数正肩ふの七郎岡崎に帰るれば伐家人ハふるや及
ぶ國中に貴賤伐むらひを集りつどうて悲ぬものこそな
りをとりまき三方原合戦の時数正ハ信長に加勢しうく遠州と
向ひうが武田おうまとすうと家とうくをて義濃のち後土岐
家をとりよ浅羽の某弓矢をやりうく伐ぬる兵と岡え

しらば彼が許さ仮此度本國さ帰るバ必ずうち死仕るべし
数正弓箭をゆり打物ゆるくかるけるく軍さあるまき変く
ゆり法ども軍さ臨むの日鞦韆を結むとぞん様故実ゆる事
と聞りくいまだ学はいぜずはれば死後さ鞦韆結緒こせ〻骨法も
こうさかうとかるたさ笑まいなんるり鞍の上乃恥辱ゆくれへバ
教を奉ゆる及ことて習ひ傳へ夜を日さつぐて地下ア味方
某の家ゆも結さそれて武勇をふるはるゆる其後太閤小
欺き囲落城を出て上方さ登り豊臣家さ奉公さて太閤和
泉をあるへ武者奉行を命ぜられ数正徳川家累代の君
恩さ叛き一生の忠節武功を空〻して血氣既さ衰ふ故
を是を戒る事得さ仕るとゆる聖人社言ゆるおりるを

こゝてゆれ

○東照宮三河の一城さ城ゆ多百助信俊を守ゆるおり秀
吉さ永禄七年五月今川氏真二万餘の兵を以てかゆるれるを
其中八千拾引ゆるゆる武田信虎を大将とゆる後巻の防さ
せ給ぬ東照宮かくと家〻召ゆる一騎ゆけさ地む
ゆひ出ア戸いんとゆえゆる敵ハ味方さ比ぶるバ十倍もあるん
殆さ信虎ハ少ゆる勇持さいと老臣ども諫ゆれども女理ハ強
ゆるゆるん仕まで人ハ少く賤ゆもよゆゆし信義の二つさよゆて
ゆて身を出ゆるなゆひゆれ敵の城攻打ゆ廿ゆ壊ゆく
なバさもゆるんを既さ味方を入おゆて今さゆ敵大勢ゆれど
ゆて結ゆくべきや主の大事ハ従者ゆ救け従者社危難ハ主の

弓矢の道なり今ハ後詰に打まけ屍戦場に暴
さるも運の奇めゝ不くと仰くまゝ是をすゝ人くあれ
き大将の殿の御為にハいのちをすてん事疑なし計も
惜かゝるいさみたゝむ其勢に乗て二千計の兵にてほつ
と打向ハせうひ信虎の八千ゝくひくゝ敗よりて入て迯
ん城ぎハにもゝつゝ城中さゝひ悦ぶ事限なし氏真
はゝゝバ口方を取囲で一人もあるべき討とゝと評定せし其
間に東照宮八百助を召具ゝひ城を出てゝ
百助今日社我ハ身にかけくそげむべくれゝゝく手の者四百
をもゝく信虎の軍にかけ合せ打破ゝく利を得ゝ酒井左衛
門尉忠次石川伯耆守数正牧野右馬允康成ハ後殿にまゝる追
かゝるにほどもゝバ忽切くづをき色あゝふまてえゝれぞ
氏真も進ゝ得ず　東照宮事れく帰陣せさ給ふ
此廿二歳ハ御ハ時なり

○永禄八年三好義継松永久秀大和河内より京に打入五月
十九日辰の刻光源院殿ハ館をかゝみ乱ま入ゝれバ防ぐ者
ども或ハ討れ或ハ自害さ沼田上聖ゆと福阿弥とゝ云敬の
相ぢゝ竹ハなぶを腰に挿て外よりまぎれ入光源院殿の御
前にまゐりゝ是ハ二人を始ゝく防ぎ戦ひハ
ん其間に日比愛せさ給ふ早足の御馬に乗東川原に
けいさせたまゝ御運をひゝくせ給ふべきと涙を流ゝ申されバ
尤忠義の志非ぬ事も申つゝまされども汝等討死ゝる給ふ

残りなく防戦ひく遂に自害する
其きはに
又月毎に流る流るとうたれ上まて
自ら筆を把て書おしまひ〻〻で光源院殿の弟に鹿苑
寺の周嵩といふ有しが平田和泉守といふ者迎に遣し北山より
出さる道にて討たるに供せし十三四の童忽に彼の平田が
詩をうたれば世は人かめ〻
是釋の義俊光源院殿を追善和歌は序にて扶桑
拾葉にとゝめられしも童の名をとゝめ侯に信長記をも
に此人は姓名をもらせり小川の住人美濃屋小四郎とて容
貌世に優れたるが供にうたれ此変にあひて三条吉則の刀
を抽て和泉が首を打落しもゝ〻すゝむ者五六人切死
て腹切て死せりとゝゆ

○三好修理大夫長慶ハ細川讃岐守持隆の長男三好ハ其先甲
斐の源氏小笠原の族ゆゑ信州に住せしが三好長房は阿波
の守護となり世々阿波に京都に攻上り細川晴元に代
て五畿内の事を執る第二は弟豊後守之長（後実休と称す）其弟安
宅摂津守冬康其弟十河一存とゝ天文二十一年実休持隆
を弑し其後室を已が妾とし悪逆を恣にし永禄五年佐々
木義弼京に攻上りしバ万松院殿八幡に立て防ぎ畠
山尾張守高政佐々木に〻みし紀州より泉州にうつる
より実休阿波より渡海し岸和田の東久米田に陣を久米田

寺小橘諸兄公の墓ありり実休墓ハ堀石の掛をとり出し中
人眉をひそめぞくいつゝ三月五日高政兵をとゝ先
陣を額ゞ示ふ〻しに実休山上より見おろし自ら先ゝ進
で高政ゞ先陣を打破る桧木山ゝ伏おきて高政の兵ゝ根
来法師相加ゝ不意ゝ切てかゝり三木内匠一番槍を合せ実
休ゞ先陣敗北しゝり実休ハ将机ゝ腰うけて引たゝ老兵と下知
し散〻ゝ戦ひ始ゝ討まゝ〻ば実休ゝハ根来左京亮と
ゝゝり高政大ゝ利を得河内ゝ入此時長慶ゝ籠り
飯盛の城をかゝみ攻る冬康兄の吊軍を忠〻且長慶を救
ん為ゝ岸和田を打出る政と孫井寺ゝ南葉引除ゝ寄あ
ゝ冬康勝利をゝゝり実休討死ゝ刀ハ光忠ゞ作也信長光

忠ゞ刀を好二十五腰まで集られしゞ堺ゝて第一の好事木津屋
とゝゝ商家ゝかの光忠の刀拭残らゞ見せて此中ゝ実休光忠也
有と問ゝ小一腰ゝり出して是なゝんとゝ信長行ゝて見ゝり
ゝゝやと問ゝ小切先の少缺てハ実休打死の時根来左京を
刎らまゝ小腦あてゝ来ゝゝゝゝゝゝゝれハ伝也
ゝくゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝ
実休討死乃時長慶ハ飯盛ゝて連歌をゝ告来る〇す
きゝゝゝ芦の一むらとゝ句人ゝ附ゝゝひさゝしふ丈
書を披てゝゝくをいそぎ〻ゝ〇古法のあるゝゝゝゝゝゝゝと
なりてと附終て此て実休打死ゝと告来まゝ今日の
連歌ゝて止へしとさて兵を出されしゝゝり

信長都ニ攻上ル及て松永ハ降参ー三好長慶養嗣義継
ハ河内ニて自害ー三好の家滅亡せり
一説実休ハ泉州岸和田ニ安宅摂津守冬康ニちゝ〻ん
ゝり畠山高政ハ紀伊國廣浦といへる所ニ流落の体なりしが
熊野根来寺ハ法師をかり催ー岸和田へおしよせる実休
後巻せんとて波海ー堺の津ニて勢揃せり立る政家和田を
攻んとすゝ兵を城の上へ引ゝ城を見おろしゝゝ
四國の兵ハ篠原右京進長房一宮長門守成助木沢和田の大
手ふ陣ー実休旗本ハ久米田ニみゝ〻ニ高政ゞ陣を見て立る政
ハ東をはゝ〻く引退くと云ゝ遥ゝ爰ニ来て討もらさんす
口惜紀年なり山上へおゝりて一戦もあ度ものと下知

もゝと按別高槻の城主入江左近大夫塩田采女正二人京より
ハ使とゝ〻く来ル居しゞ敵を小勢なりと見てたのゝもしれへど
今巳の時なり高政軍配より味方の為ニハ大山なり唯今が
らバ十ニ十敗小もゝ〻ー若時を移ー東北谷より二手ニゝく
あひもゝひ午ハ時小及て軍をすゝ山ゝ又敵を南山へそびき
出もゝ此二ッの間ニゝ〻ゝバ実休心安ゝれ時を過さバ敵ふ
利有べー切てかゝりもゝバ山を尾伝ひニ東へ下る
ゝー左もゝバ南へ下ル右ハ尾さゝへ引ゝべー入江塩田二手
小兵少ゝれバ篠原ハ城はしゝへ引ゝん打つまて伏兵ふなゝ道一ニ
高政夢ふも知ゝゝて東北の道ニ出なんと待ゝけて討ハ安が
ゝれん高政ゝー物見を出して見付るゝどなゝバ南の山ニ登り

横合ゝ突かゝられゝ高政ハ籠中の鳥せとて二人の詞を用ひゞ
入江等東北の山ぎハゝ進で行ふゝ実休ハ孫原ゞ兵をも
て高政を誘せゝふ長房いさゝかゝりて進ミゆく上の山より
根来法師成田玄斎雑賀孫市ゝ実休旗本僅ゝ人も左へ
ゝかりて切ゝかゝり彷徨を一時ゝ決せゞ阿讃淡の三國ハ
兵をゝ引ゝ退くゝ一ゝゝかくハゝゝの実休をうちかゝさバ
ゆゝゝゝ戦死せべしとゝハ孫市子細ゝや及ぶとて山を下りゝ
さい一文字ゝ実休旗本ゝゝ忽実休を鎗ゝ下ゝあゞて
討とゝゝ淀田ホハ敵をやてどんどゝざれバいゝとゝひ物見
をゝ出ゝホ実休討死を生ゝ来るゝさゝバゝる政ゞ陣ゝ切て入討死
せゝゝて分け向ひゝゝゝ搦ホのゝゝる敵をかゝゝ受塩田も討

死ゝゝれバ残る兵ゞも堺をゝて敗北ゝりこれ永禄五年
壬戌三月五日久米田合戦ゝて実休三十六歳なりとゝゝり

○毛利元就豊前門司の城ハかゝみをゝて引ゝされゝ時大友宗麟
乃士大将瀧田民部ハ一弱波うち際ゝ馳来る小ゝ川隆景の士
浦兵部宗勝船をゝりゞ陸ゝあゞり瀧田を討とゝて帰る遠
くゝをゝる人誰なんとゝゝゝ元就只一人陸ゝ上ゞゝゝハ必
兵部ゝゝべしとゝゝれゝゝ果てゝゝゝハざるゝを井上伯耆と浦
と二人勇名世ゝゝ二人ともちぎれゝる物の具をきゝゝ又宝
ゝゝゝ得ゝゝゝもなく瀧田を討ゝ時も人ハ涂ゝりてゝゝせゝとぞ

○佐ゝ木と三好と軍をゝて佐ゝ木ハ乱ゝ陣ゝ三好ハ赤山ゝゝゝ三好使ハ
以て中村新ゝ郎とゝ剛の者ゝりをゝやとゝりん人あゝバ出さまゝ

人まぜて戦はせんといひしかば佐々木が内ゝく江州より[illegible]
○さ永原安藝守といふ者を[illegible]出し修完ち村石地蔵の前へ
ゝ出あひ〳〵永原ハ直後中村ハ十文字ゝ鎗ゝ散〳〵ゝ戦ひ[illegible]
永原を突伏首をとる中村ハ近江國の人なり一日ゝ後を合する
事十七度首四十一級を得ゝ[illegible]有りしば世ゝ後中村と称しゝ事
永原を付ゝ[illegible]ゝ時室町將軍靈陽院殿義昭江州矢鳴ゝ
ゝをゝ〳〵感状小朱塗ゝ物の具朱柄ゝ鎗をゝへて[illegible]
ゝ[illegible]ゝ一説ゝ拾別を半分領ゝ[illegible]松山新介が士ゝて
唐冠金纓の曹をさ[illegible]ゝ

○相模の深澤ゝ軍小北条家の先陣ゝ大將小条左兵衛大夫綱
成敗北〳〵ゝ[illegible]ゝ旗をひろひ取て後ゝ[illegible]信玄家ゝて逃
走ゝ[illegible]ゝ捨ゝ[illegible]ゝ小北ド必地利をゝ[illegible]ゝて戦を心がけゝ[illegible]
らん旗を棄ゝ〳〵ハ旗さゝの形ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
田一徳斎が末子ゝ源次郎ゝ左兵衛大夫が武勇ゝ[illegible]ゝ[illegible]
旗をあゝ[illegible]ゝ練結三幅ゝ[illegible]ゝ地黄ゝ八幡ゝ[illegible]
字を染〳〵ゝ物ゝて世ゝ地黄八幡ゝ[illegible]ゝ左衛門大夫
かゝ〳〵ゝ[illegible]ゝ恥辱を雪ゝ[illegible]ゝ伝玄
遠さ慮ありてかゝハいれしゝ左兵ハ其比すぐれ
〳〵ゝ勇ゝ[illegible]ゝ必死の覚悟ゝ[illegible]
其鋒支がゝ〳〵ゝ[illegible]ゝて其憤を[illegible]ゝ為ゝ
○永禄十二年佐〳〵木承禎柴田勝家が[illegible]の長光寺の城をか
ゝて攻る遂ゝ惣が[illegible]を打破る[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ防

戦ふ郷民佐々木が陣よりして此城ハ水の手遠く遥なる所より
水をくれそをとり切絶なるべしと告たれ
ばこれ兼複悦て水の手をとり切り城中困めもよられ
るをとりハさぬ為ハ和平せんとて平井を
以を使ゝ城中ニ入ゝり平井勝家ニ対面して水を請釜
ニ水ゝちくるを小性共人してかき出ゝ小平井手を洗ひ
小性残まゝ水を飲ニすてゝ平井ひてかゝとゝバ事のたゞひ
ゝ有ゝ行やしたあへりかゝて城中既ニ水竭られバ勝家暗
ハ討ゝ出切死ニせんとて諸士をあつめ最期の酒宴を残まる
水を向へバ二斛計入るゝ釜をかゝ出ゝ出ゝバ此間の渇をやす
ゝて人ゝ汲のゝてゝられバ勝家眉尖刀乃石づゝてゝて釜

砕ゝり夜明方ニ門を開て出る佐々木そひもよゝられバ大ハ
敗北しゝるゝバ勝家首八百餘級を得ゝ岐阜ハ献ず勝家ハ
長光寺ニ行り信長感状をとりゝ賞せゝ事大方なゝず
ゝ勝家を釜わゝ柴田と世ハ称しゝゝ

○信長勝家をもて先陣の大将とゝ勝家固く辞ゝまでゝ再
三ちゝ仰を兼ゝぬゝて退出ゝる時安土の城下ニて信長旗
本の士ニ遭ゝるゝに行あゝり勝家無礼をせめて遂ニ切て
よてゝりきれバ信長怒られゝゝ甘時勝家謹でやゝるハされ
バゝて先陣をバ是非とも辞しゝゝるゝ不細ゝて辞やべ
きや先陣の大将ゝる者威権なゝ時ハ下知行ハまゝざる地ゝ
ハゝとゝいへゝど信長詞なゝりゝ

○三好家滅し時料理庵下の上手と宣へ坪内伊賀といへ者生ぐさとなりしが放し囚人くるくる年迫て侍菅谷九右衛門に賄やりる市原五右衛門坪内ハ鶴鯉乃庖丁ハ云も及ばず七五三の餐膳の儀式よりくちれる者なり其上子ども両人ハ既に奉公やれへバゆるされて厨の事を司らせやさんといひると伝ゆて昭和の料理させよ其塩梅よろんとなりしらバ則坪内を召て膳を出させる様信長食して水くはゝてくれざるよそれ誅せよと怒るまつらバ坪内畏承い今一度仕らんそれも法ん〻と應ぜバ腹切んとゝへバ信長許容せるまこそうさてその翌日脂を出しるふ味乃ゝるを半ばのみよりられど信長捻て禄あゝへられるを坪内辱さはやてはくみる社塩梅ハ三好家の風ちうきされ塩梅ハ第三番の法梅ありう三好家ハ長輝より五代公方家の事をゝ日本國の政をゝくゝひめれバ何事もいやしゝ其好せ第一等れ塩梅を吐るなりうまバ第一事ことゝうちされ風味ハ鄙ありるか風味ハ入ゝゝ入ゝゝ平内が詞とゝひられバ家人信長と恥辱をあゝ

○永禄十二年四月東照宮濱松ゝゆゝ時

すまハ今川氏真を武田信玄攻落し氏さいゝゝの山家ゝ引ゝりゝを　東照宮父義元のゝゝゝゝ遠江をバ徳川家ゝを伐むべし信玄ゝゝれゝゝりハさゝりぶき なりはゝバ小田原と相ゝて両旗ゝて信玄と軍ゝべきを

氏まつを仰られしかば赤ゆやて掛川の城を徳川家ゑ引て
氏政信玄薩埵山にて對陣足柱ぜり合有　東照宮の先陣
後ゐへ攻入山縣三郎を討を追おとし信玄前後を
やうやうきれく勝利有まゝ氏を討て甲州へ兵をとされ
まゝゆゑ　東照宮も御帰陣ちり
堀川乃城を打ゑさせまゝ時大澤左衛門尉
ゆきまゝ永禄十一年　東照宮遠江を過半治めゑ
一時降参しくるもれなを
ゞゑれ若ども去年よりもらゞまゝる面々相計て尾張主膳
村山修理亮人を大将にして堀川ゑひそうに一揆をかゝへ通らを
まゝを待うけく討をんとまゝくゝふそれをちゝめさず
して七騎にて打過させまひぬ一揆どもゝ騎馬のゆゝ
うれゞかくゝもまゝゞ其あゝゝ石川伯耆守数正通りるを
見てはて八先ゑ通らせゝれゝやきゝやうく討ゞきゝ物をゝ悔を
ゝゝゝゞ創業の人君天ゑ佑おりゝゝゝゝ堀川の
一揆を攻らゝゝ小此城淵のはゝゝゝ舟八舟の出入自由ゑゝ
おゝもゝ引ゝて唯一方口ゑ城ちゝしゝば落べきゝなくて皆討
ゝゝまゝゝ

○永禄十二年尾張の清洲にて　東照宮信長ゑ始て御對面ゑ
時他の刀持ゝゝ士ゝ式ゝゝゝめゝゝ植村庄兵ゑ家改御刀を
持く通らんゝゝゝゝゝもおゝゝゝゝゝゝば徳川家の士ゑ誰ば下
ゑゝく止るやといひすゝゝ杉ゝゝゝ御前ゑ白洲ゑまゝゝるを

信長ひそかに伺ひ考へて問ふ　東照宮ひとり士ありて答へて伝
長柱村八郎兵衛勇士と今日の合戦は大事と能く心安らべしあつ
まこと能士なり　いとど感ぜられる莊左衛門出羽守といふ

○永禄十二年信長伊勢の國司小畠中納言具教を大河内の城に
攻る数月絶て堅強くしてちつとも　ひらまず信長織田掃部助を使
ふして信雄をして具教の子具房の養子として和平を求む
いなせられしかば人質を少々因て和平事なりぬ伝長波
阜に帰る二男茶筅丸十二歳なりしが士ありて伊勢に
行大河内に入て國司に対面し船江に居る具教八世を具房に譲
て三瀬といふ所に閑居せられしが尚信長小胥く志ありしかば
信長國司の家の老たるを分らひ天正四年十月廿五日三瀬に

て弑しまつり具房八信雄の養父なれば河内に入て歎きて
ぶ天正十六年に死去廿六年に親房卿より具房に立て十世に及ぶ
くるん具教の弟南都東門院に住僧なりしが具教弑せられ
ることを守り教をおて伊賀に赴き還俗して北畠具親と称し
三瀬河股多藝小梨の諸士をかたらひ仇を報ずんとすれども
利なくして中國に流落し毛利家をたのみ備後に鞆に
居しうち多く具教兵を起し射天正六年信雄の兵波瀬著れ
城を攻おとす六呂木山副波多瀬三郎以三人を生ぜりうれ
ど死罪ぶ立べきと浅せられしかば三郎が容貌世にすぐれ
信雄生すくなりといえども絶三郎ぶ三人同じく生ぜれ
罪又相同じ二人死しく一人生れる事面目なし共に謀せ

らまほしへとて三人八年老ぬ惜むなどを身に非ざで三郎八仰に従
ひしへとすゝむれども中入を遂て三人共に磔にかゝらるゝ時に三人
君の御為に命をすつる事士の恥出面目なきてゝ事なり
とて謡をうたひ物語りして誅せられ三郎此時十五歳を
過ぬ人なりしといふ玉井新次郎といふ者具秋に心を合せ
信雄に背き父兵部少輔と母ともに非戸にかくれ居るを
捜出して櫛田河原にて磔にせられ無紀少輔子の彩次郎を
呼て汝今度君の御仇を報小畠此家を興さんと志しなるや
士の本意吾生前の悦なりとて水を乞て父子三人盃をくみ
かはして其後殺されしとぞ織田家此刑罰仁者の道にあらず
其暴逆終を全せざる事なしとぞなりし

○永禄十二年今川氏真遠州掛川の城没落の時天王山の
合戦に大久保治右衛門忠佐敵をつき伏物の彩十郎忠隣に其
首をとりて渡す功名にせんと呼りれば忠隣十七歳なれ共
人のれさる首仕るすべきとて敵此中にうりて首をとる
無形系にて諸軍散乱しく 東照宮に陣所なる人少か
りしに御例をとられまじ侍八歩立にて御供しなるを小栗忠
蔵敵乃馬をとり来てそれに乗まと仰ありく其うに乗て
御供やとり後に相摸守とも申せ八此人なり

○遠州にての事なりしゆゑ此時の事なりや 東照宮の御内
に高木主水清秀村越与三左衛門と申る兵二人味方ふたれ
き細なりてをたづねて敵十騎計追来る高木

鎗をつとり進て一足も引ざる紀ぞと呼る村越弓を矯つがへ
後わきを射ん心ぜゝく鎗をせとそひたれば敵もゝむきを
人又引退くかくもゝ事数度ゝ及ぶるかゝて左右沼ゝ一弱
うちれ地となりてこゝでよ紀ぞと呼るこゝ高木ゆゝ
留る先かゝる敵をつゝき伏きバ村越大音あげ其首やれ
ゝゝに敵一人射倒を敵ひゝむを高木いゝ進で又一人つき
伏ゝきバ村越も又一人射倒てゝゝ追ぜれバ心ぢゝふ引
ゝゝゝり

清秀ハ水野下野ち信元に属せ時三州苅屋の城に度ゝ功
名ゝゝ後　徳川家に仕水野ゝ属せ時石が洲とゝ戒て
二河の兵と後を合すゝ事一日に七度石川伯耆ち十七度

ゝゝ内記とゝひゝが逃に名のゝゝ鎗を合せ和引にゝゝゝ
ゝ長久手れ軍にハ清秀内藤四郎左ゑ武者奉行ゝゝ紀
清秀部ゝの後関が原れ時隠居せゝが野州小山へ参りれ
バ度ゝれ功名を仰らゝ　台徳院殿綿の帽羽折を賜ハ
ゝゝゝゝゝ戦國の時も一日に数度れ後ハ平ゝゝゝ
高天神小笠原與八郎が士林平六郎遠州豆大寺にて六度
鎗を合せ信玄伊豆薙山を放火ゝ山縣をおゝ人ゝ
小塚兵衛ゝ引ゝゝ口に三ゝれ浪人河村伝兵衛白男
に船れ字の市ゝゝゝく敵を追ちゝゝ後を合すゝ事一
日小六度といゝゝり

○太田三樂が内に太田下野とゝ士ゝゝ人を識る其用たゝバゝり

○しらば三楽いられる故でと向下野別の子細もいひきとへば連歌
もる者の古歌を見れハ連ゞ連歌ハ益せんとなり士の功名を
志さ者も又志なり其人くれ嘗好ものよりくあぶんへば十
ハ九ハ中ぐひいハぬものなりとぞ答ける
○北条丹後一尺四方ハ白練に黒き蟻を繪ハ書て指物にあるを
を謙信見て汝ぐさ一抱にけるに小さハいなる子細ぞと問る
に丹後謀に味方にハ見えがくれべし此ハ敵ハ進むに
先ぐけ退くよりも後殿せんに他人の大なる指物も此小四半
と敵の見る所ハ同じくんと存るなりとぞ謙信ことゝ
なりといとれしとぞ
○浅井備前守長政王潤川をかぶりて齋藤龍奥と軍にある

時長政五百計の兵をすぐり関原野上ハ宿ハ火をかけ桂井の
前なる小川ハ柵の木をひく待ちけるに竜奥一番計にて出るを
長政ハて百人計を菩提の径より敵の後へまハ世自四百計
を以て敵のむかへるを夜討ちにまた径よりの兵もを業
をとひもよるぬ所より岡の声をなげしらば龍奥内通の者ある
よりまハ出ハて岐阜にひさ長政大垣の辺所くに火を
かけ出せられば龍奥敵勝に乗て大垣を攻るなんいぶきすけ
よりて岐阜を出しらば長政やぐて引ける時足軽の物ハ荷
を三十人桂井ハ土民の家にかくしより龍奥桂井ハ入て士卒
も疲しらば兵粮ハ持ておくるる時かくくる足軽ども
ハ火をとりけく焼るる長政見ひもよるぬ所へおしよせて

ふうち破りやぶて南宮山に登りて敵をまち龍興二度まで敗北し口をくゝりて四面をとり巻てあやまりたうんとすれ共長政人て数ハ大軍なれ共十死一生の戦と八見なれ共下知あるさ内ハ翁の一筋も射べきにといひく攻かゝるを待て山乃上より一文字に切てかゝるまゝバ竜興大に敗軍し給ふ

長政を恐まて復軍をゝる事無りゝ

○丸毛兵庫助長住其子三郎兵衛長隆龍興に奉公して美濃の多芸郡大塚乃城に安藤伊賀守氏家常陸介龍興に叛て大塚に籠る兵庫父子三百計大塚より一里ばかり出て陣し城近き百姓老若男女をいそがの催しをゝふ竹竿をもゝせ大軍の体にもてなしけひ氏家を撃破りしゝバ安藤をも又龍興に降参し丸毛父子に禄を増し感状をあたへられゝ

○信玄駿河に攻入時朝比奈兵衛を始として軍すゝ若ちく今川氏真落らまゝぶバ信玄とく今川の館に乗て名物の寶ものゝも奪ゝり来まて下知せゝ馬場美濃ち氏房聞もあへず唯一騎鞭に乗を合て鍛に掛入火をかけく焼をゝひゝ乃至宝物ども奪とりゝく貪欲の師なりと嘲れん事を慮ゝるなゝゞ

○元亀元年の春大友左衛門督義鎮肥前の龍造寺山城守隆信をうつ隆信和を乞しゝバ大友兵を加へゞ肥前と筑後乃堺に千栗といへる大川あり吉岡下総入道宗観といふ者龍

造寺八大敵なり傷負もわるまじ故あく和を乞ハ佯あるべ
千栗をとらんと事たやすしといへバ義鈍も尤かゆして
○豊後ハ留守小置る佐伯紀伊守惟教甥子孫四郎惟吉
田原近江入道紹恩を呼寄六千の兵を二陣にして千栗ハ
渡小備へ川を隆信と半ばとりて敵の引退ん所
を不意に撃んと謀る大友ハ設有事を覚て退ぎ
となり
○元亀元年六月信長朝倉をうつく龍ヶ鼻小谷ハ　東照
宮援兵の為ハ四日江小小谷ハ評定の時信長鎗を抜出
て此後ハ鎮西八郎ハ鏃あり　徳川殿ハ源氏なまバなれ
ども明日ハ軍に勝利ハへとなる紙をとる今ハ虎の皮あぐざや
の御絵是なり
○姉川の軍小信長ハ龍ヶ鼻山を左りて浅井長政小向る
東照宮ハ弦ヶ鼻を右りく朝倉ヶ二万あ戸りに向せる時
小笠原與八郎氏助二千計先陣に進で川を渉る氏助ハ兵伏
木久内中山是非之助吉原又兵衛林平六伊達與三郎門奈
左近右衛渡邊金大夫照七人槍を合すれ中小も渡邊ハ朱の
傘小金の短冊十八ハ付さるさ一抱を持堤の上を進む信
長ハて其夜召出しく天下ハ絵なりとり出状に負宗の刀
を添て与へる六人ハ者ハ憤て各拾ちくむで鎗を合せ
しるも畠の中なりし一左ハとそらまぢひとやるれバ六人ハ
信長感状をあくらる

○姉川にて酒井左衛門尉忠次先陣より二陣ハ榊原康政之酒井
を始小笠原与八郎菅沼新八郎奥平半川を渉てかゝりけるに
岸高く上りかねたるまゝに榊原真一文字にすゝむで上りがるに
岸を無二無三におしあげよと云いとりしくといひかけしあがり
酒井が先にすゝまんとするを見て酒井が兵ハおくれてハ無念なりと
競かゝりて利を得たり　東照宮榊原が二の手にてれたるを以来
の手本に二の手ハかくあれかしとこそと仰られしとなり

○姉川の戦に坂井右近が子久蔵十六歳にて討死す久蔵ハ十二の
時信長に従て京に入し比近江小郡にて鎗を合せたる剛の者也
三井角右衛門生瀬平右衛門二人とも久蔵が首を得たりと云
二人後関白秀次に仕へたれバ此事沙汰になりて三井がいつはり
なりとて鷹部屋におしこめおきて罪に行はんとせしに三井いの
ち惜むにハ非ども人の功名を盗める悪名の子孫の恥となるらん
事口をしけれバ今一度詮議したまはりんへ證拠ハ浅見藤若
へ問たまハバ実否正しかるべしと訴たり浅見ハ安土より呼れ
たり浅見ハ生瀬と久しき友なり三井とハ日比中よからざる不通
なれバ疑はれじと三井がいはれて定めたるべし　三井惑乱して涕を
流し人にあざけりと誹笑ふ人多し然て聚楽の広間にて奉行
列坐して雀部淡路守をもて尋問る浅見答けり生瀬ハ年
ごろの知音なり三井とハ不通なれども是非世の人の評せん
事も迷惑なり他人に仰付られよと懇に辞しけれ共中より
ぬ三井が虚妄をいつはりて心よからぬハ理なれども證人にひきたる

上へとくやせを勧らるれども柴辞しやに秀次ゆて重て辞に
ぞ〻びとなりゝまゝバ其時浅見今ハ已事を侘ごん武義れ
論少も詐偽ひまず坂井が首ハ三井がうゝふゝぶれかく
又其ゝゝゝ紀も比類少くゝん生瀬ハ行と存過ゝゝやといひ
ゝれバ一坐該てとかくいつくれくこまゝりて三井を赦く
賞せゝる生瀬ハ秀次ゝ寵せゝゝのかく罪ゝ及ばゞ右近ハ信
長の大将なり三井生瀬ハ紀倉浅井両家の士なり洛ゝゝ
後京極高次ゝ仕へゝく大津乃城ゆゝく武名ゝゝゝゝを

○信長浅井長政をうつ時長政が本造の陣俄ゝきわゞ伏の見
えゝゝバ猪子兵助を物見ゝやらまゝるゝゞ又金松弥五左馬を
も出さまゝゝり猪子馬ゆ白あゝかゝせく池帰ゝ敵ハ引退れと

いひもたゝゝゝゆ金松兼帰ゝ敵おゝゝせれとゝひすゝゝ又先ゆゝ
ゆいく鎗を合せゝゝり信長後ゆ二人を呼て汝等ゝゝゝゆハいゝ
ゆと問ゝゝゝ猪子敵ハ若つきゝゝ馬を遥ゆ遠く引のけれなど
ゝ引退くゝと見ゝれゝゝゝ金松承ゝゝゝゝゝハ猪子ゆ問くれさ
まゝゝん軍状志れ老改ゆゝゝゝて空く退べきやゝゝゝゝゝ
て戦ゝん為となゝゝれひきとやせゝゝバ信長大ゝほめられゝ

○信長越前ゝ攻入時朝倉義景二万汁の兵ゝて刀根山といふ大
山ゝ陣どり禁ゝ信長の先陣ひゝ居ゝりゝる日信長井樓ゝ
上ゝ歌をゝゝゝゝ敵ハ今夜必引退くゝゝ先陣の若れなお
ゝゝゝとゝ使を度々やゝく下知せゝゝ是を少て殿ハいゝでかく
ハ仰れやゝん敵大軍ゝて山ゝ據ゝ地の利を得く且主義れ

バ伝条引退ぞきとあやしくもくを夜に入ても信長ハ松井横に
左てく敵陣を覗で目もたれさぶしして有しゐ丑の刻ぐらうますハ
や敵ハひくぐでとうちとそて引き螺ふきくてはせ馬に乗先陣
の大めゐ山れやつだくゐ出ぶんくくふ旗本れ者どく功名せよ
○そて去一文字にすすまれしゐ累して先陣ハおくれて信長の旗
本にて勝利を得らまくり信長常におくくゐ者ぞ大ぬゐ山と
てくくいまてくとを

○上杉の奮ぢ上野れ長野信濃守業正ハ在五中将業平の後
亂たんくといふ世く上野筆の脇に立城ハ大名明神れ山の
尾続をとくく城ぢ郭とくる郭の形箕れ手に似くくて箕
輪といふ上杉家衰ゐれども猛立して武威を炎くふ信玄小

属せぶ信玄くまくを攻くくと五年終小一度もおくれをとくゐ
病れ後二年を経て落城ぢとくり

○元亀三年信玄参河遠江に軍を出し二股の城をとり老水
の手をゆくり切ゐくぶ中根平左衛門力の限を支へゐれども竟小か
なハで城落ちゐくり信玄そまくり箕形原に軍をすゐ心濱
松に八織田家の加勢もまと信玄守てたゐく来て合戦八十戸
ぢくくておくんをおくぐきやとゐくに三河の武者城をもゐ出て
ゆくんれハ出くバ一戦に及ぶくと備くぐり有濱松の軍兵日既に
暮なんくくくぐといさみゐくり一軍をべくと口々ゐ鳥
井四郎左衛門物見して乗帰りて人くハいり小中れも今日の御合戦八
然くぐくぶ敵ハ大軍れ先陣小使をやり兵をつぐきせく

り是非法一戦となるべば敵もつよの人へ申さんとちらひく
かゝらせるべとゝ　東照宮家康召汝ハ用ゐもつゞき若しそて
々の物見とやとゝふ仰ておくれとも目前に敵をあゝと
通してゝ生がひもたゝと怒らせ給ふ家康の目のあた
りにふこゝて勝敗ハ利害をバ見さハめて中れへ御敗軍をとろ
召法かゝりけるハ殿の御仁はきゝ給ふ後紋の左を知
ぬ人こゝておくまゝ考ゝと以ての外に罵ゝとゝ試つと無出し成瀬
義を尋々ふ功名をゝ即をまゝ討死しゝ少
味方原の苦衣をゝけを定らゝ時成瀬と鳥井と先後
を争ふまゝく既に刺ちゞく死ゝゝ色あられを
かゝの人くゝ申ゝふ鳥井成瀬に向ひくゝ信

委と一戦あゝゝなり織田家の援兵も来ゝ士ハ一人
も大切ハ時ゝふ私の争論ゝ死ん不忠ゝゝ二人
ハ大死して殿に損ゝけをんゝの軍に功名ゝ
して討死せんハいゝ成瀬少ゝとひいゝ中されゝ
哉わゝも左ゝ必ゝ明日討死せんいざゝて酒ゝかハ
深更に及べを　東照宮ゝをゝ成瀬ハ信長
乃加勢の目付とゝあゝ井ハ坂に向ゝ鳥井ハ淀表
先陳の目付せゝゝ作れゝ二人ハ忠死を報ゝ出ゝゝ
ゝ井も一所ゝゝ二法先かけゝ二万騎ハ敵に弛向ふ鳥井
曹首三ツゝりて成瀬も首三ツとりて引あひ共に打とひて
首をバ抛ゝて又かけ向ふ鳥井又首とりゝ成瀬をゝゝ

只今山縣が陣よりかけ入り討死し敵共そこをうちとり
を堅て成瀬と先ぶれ汝ハ早く帰りて明華上かと
ゝへと侍者小いひすて信玄旗本を出してかけ入んや
せを土屋右衛門ぶれ若ども早かくみかたを井ハすぢれて
半々ほどの剛の者ども三尺余の野太刀を打ふり死
狂ひ切て回る土屋が曽を破よくぶけよと斬ふりふる目眩
て馬より落る多兵四方より淪すこめうして井をうち
ゆうゝとり敵も味方もおべて惜こあへり
渡邊半蔵も綱も抱へして池帰りとも味方中く危くん
先陣をよび返させんとすれども壮士等いさゝかりて
柴田七九郎大久保治左衛門すゝゆくを義ひゝ生を

ゝとも少入れば甲斐の先陣小山田に向て足軽をかゝる軍始まる
先陣乱れ足なりゝれハ石川伯耆守数心馬より下りて
鎗を挑げ一足も引ずと呼ぶ一陣の士卒各折ちきて淪ぶ
すはを仕り待ける甲斐の兵競かゝる敵近くと引受一
ゝ立あがりをいゝと声をかけて追かゝる外山小作一番淪
を合せてより日暮れバ甲斐の大軍進みかゝる　東照宮御
旗本をひきゝ切てかゝらせ給へバ遠江の山家三方小山田
退立ゝ敗まるり申の刻よりゝ軍始まりく夜ぬくまでの
軍小衆寡支かゝくて崩まゝ桐糸ハ東の方西海ふ
向て引退く伝七郎侍大将平手汎秀ハいかとゝ正を迎合
せ討死を鳥井忠吉左を馬を始として河流原太郎　長谷川

紀伊守加藤二郎九郎太郎兵三百騎人討まし敵ちかうよ近
来ら本多肥後ち忠直後殿〳〵敬近付ぞろてたゝ遂ふ
討死さて甲斐の士大将秋山伯耆守晴近透間なく追うけ
ゆり馬まうり出り動くなり〳〵ば東照宮馬をひき
うへさせられ時夏目次郎左衛門吉信さいを馬討死の時さてハ
れいたとりて馬の口を濱松の方へひき向鎗をやり直し
馬のさんづをたゝきけく出ゝきられば馬かけ出ぬ夏
目ふゝ止り多勢よりうまれ捨れ柄のれゝ折ゝ我く討
死さて
夏目ハ濱松の城留守なりしゞ矢倉より軍れ様を見て
いそぎ馳参りとく城内へとゝせぐ吾城下ふ

於ておけるバいのち生て何ゝせんとて馬ち副の者ゝ口
をゝれせと仰らまてを吉信馬の口をとれしてとかく
下知〳〵馬より飛下て馬譚をたゝりれへ討死仕るべし
とて馬に付ゝる畔柳助九郎ゝ下知〳〵て馬を城
の方ゝひきむけさせ鎗の柄少〳〵馬のさんづ出きゝ
取てゝ〳〵十文字れ鎗ゝて追ゝる敵を支て討死〳〵る
ゝ〳〵ゝ前三河一向宗一揆の時彼宗門を信ず
ゝ人〳〵ひしくと相あつまり探井の松平監物上野の海井
将監大草れ松平七郎もくみ〳〵ゝ中ゝも夏目次郎左
衛門ハ一族も多〳〵りるゞ彼宗門ゝ徒黨〳〵て已ゞ知ず不
小要害をかまへたゝ〳〵と松平主殿助伊忠不忠

又おしよせ木戸を打破て攻入るハ夏目防ぎゝ帑藏の中へかくれ入るを弑殺すハ鷹の中へ鳥を殺すに似たり生けくことと仰ぎ主殿うち殺して後ハ殿さきをいひおゝ人数を引ひらめ夏目岡清れ方をふゝ拔かゝる仁愛ぬるの殿へ楯つくさゝ事の悔さとて共日より宗門の本尊のゆへ殿の御為といのち捨すてさ殺まつれし いのりくるゝ果して義死をとゝげゝるより又一説に夏目大津宮右衛門伊織乙部八郎等六千餘額田郡吹田のゝ城へ寄て城ハ深濠の城より松平左反助伊忠是を攻る乙部ハ夏目と無二の親戚なる故同しくこゝろ遂に忠義を案

夏目をたすけん為に久留善四郎とおもうり伊忠に内通しゝ事をを引入るハ針崎へおちゆく夏目ハ藏乃中ふかくまゝを乙部夏目を助けんと伊忠に乞ふ乙部朋友をすてゝ事を伊忠ゝ夏目も又武功の老ある藏を殺ゝ此旨をおゝさゝれバ御赦あゝ夏目ゝて一揆に成ゝ伊忠ゝ出て伊忠に降ゝ

水野左近大夫もひき出ゝ支へ敵ゝ成ゝ吉右衛門日下部兵右衛門小栗忠義田治郎歩ゝ成ゝ一騎切て落ゝ御ゝ供を敵六七騎すゝみ来ゝ成ゝ一騎切て落ゝ御ゝ供をかくさゝ六騎ハ退ゝ

大久保新十郎忠隣浜馬のかゝりをまもるまゝに大久保十郎右衛門忠世さいがけの旗を打立敗軍の味方をあつむる其ひゝ江濱松より引とらせまひらり敵城近くおし寄まゝ居彦右衛門元忠玄默口より討て出おめ渡るまゝ藏兄弟彼屋玄五兵衛櫻井庄兵衛名のりかけて槍を入敵五人討とりおめ〳〵る敵を追ちらしてをれバ郎右衛門と相たゝかう鉄炮を打ぶ味方疲たゝ〳〵ふ天地三印を祭ゐ敵も皆引とゝ敵大久保七郎右衛門と心を合せ敗軍の中を求めく鉄炮只十六挺打ちゝと引具し信玄ハ陣さいがけ江向てうちかけ〳〵ば甲斐ハ軍夜合戦江かゝるとあハてゝ〳〵案内

をもゝ〳〵でさいがけへ落ゝ若其数をもゝ〳〵

又一説其夜酒井左衛門忠次今夜武田の軍兵疲ゝ人ハ必定なり夜討せんとてもゝのびを出し信玄ハ陣ハ旗を見せゝふ爰江ハ信玄ハ旗の故なりとハ此ハ又ハ旗を立ゝるとハ忠次家ハ疲まゝる兵を後陣江引退け信玄を先江ゝかゝゝ伝玄ハ慮沙ゝ〳〵ゝとて表討ハせ侍りゝ至後江ゝ小生夜信玄の士卒一人も残ハれる者なゝ〳〵ゝ

夜あゝて信玄兵をかへしておさゝべ江越年あり是元亀元年十二月廿二日遠州無形原乃合戦なり

○無形原ハ軍終まゝて皆濱松の城を攻んとハひゝふ信玄

勝て曽の緒をしめんとゝ云ふことゝして軍をかへされける時
信長ハ白須賀より毛利河内守山中より瀧川伊豫ち吉田より稲
葉伊豫守其兵三万あまりをおくりとゞけ伝兵勝より兵
て引ゝとゞ八信長二万五千をひさめてあるを毛利滋川木
もこひもよゝぬ所ゝ折てかゝるをどれらば必濱松より切く
出中小ゝりこゝろく軍せんと吉田より岐阜まで一里小一人乃
ちたびの老をおいく行まゝるゝ小信長ひさをされしよりそ
信長の謀ゝくなりぬ

○味方原ハ軍より甲斐の兵ちげしく追かけさわしゝバ
東照宮幾ゝびとゝく清馬をゝゝ大久保五郎右衛忠
次手負て歩ゝらゝなりゝゝ菅沼菱茲定吉より諸をかれを
忠次を馬の前輪ゝのゝせて退ゝりを後より菅沼より長光の
刀を賜ハりく賞せさ給ゝ菅沼又引ゝて追くる敵を
防ゝり天野康景長坂添次郎坂部又十郎等もゝゝこゝま
ゝく防戦ふ大久保相摸守忠隣此時彩ゝるを射ゝまゝ歩ゝちゝ
ゝて危ゝりを洗ゝ小栗忠蔵久次郎と称ふ新十郎
ゝう武者ゝられ助けよと仰られしゝバ久次巳が馬より忠隣を
抱さの退く引退く敵透間なく追ゝゝゝゝる武者ゝ
ゝる武蔵中三郎重次ゝ合せて討ゝられバ後より信國れ
刀を賜ゝゝ畔柳助九郎清馬のかゝをゝなれぞ後より重の
扇を給りて賞せさ給ゝ追ゝめをうけ
ゝ水野太郎低ふゝゝ防戦ゝを清馬

を引返さる成瀬土右衛門正一ハ兄が最後ニ汝ハ此あるべき
案内よくしられ是御供して悉く引とらせ奉るべき由云る
ばかり御側につきまゐらせが引退て敵を退きぞけ給
濱松の城ニ入らせ給ふ鳥居彦右衛門元忠ニ御下知なして去
默口の御門をひらきて引出る兵ハ城入せらるゝ敵きたり
まゐるもわがこゝろ城ニたやすく討入ぬさやゝ門を閉ぞ
かゝる火を所〻ふたゝべしと仰らるゝ此日ハ天雲ハ雪ちらく
こまゝまはなはだ甚し御供して馬より下立城中ニ入給ハ松平ハ
京三郎康定松平除九郎景忠平岩七ニ助親吉大久保忠
隣菅沼定吉都築惣左衛門秀綱多分ハ都築が妻粥を拵
世来たて御供の人〻ふくぞりあゝ上後ニ衣服を賜ハて賞

美ハ今日敵の跡をふんで戰ハゞ猛べきて味方たやすを過
て心なゝぶで敗軍しぬ口惜き事なりと仰あを湯つけ飯
を侍女久壁きまゐるまバ三度かゝ出きひまつれらりとく
御枕をかゝゆられいびきかきて御睡りを山縣城近く攻
ようせ門此扉を半ふふ暇なと完ゝりいふ攻入たやとい
を馬場美濃守ゆて打まけゝ引とをられバ門をとゞ搭を
も引ぞをたハゝくかゞを火白日此めゝり謀あるべき
うかゝゝ攻べゝ徳川殿ハ海道一の弓とりなをよく
見届てゝとて猶豫しるゝ城中より鳥居彦右衛門
渡邊半藏同半十郎榊井莊ニ助勝ハ甚五ニ衛を始と
てくゝきゝの剛此者とも百餘人突て出ばゝ甲斐の兵虎

三ノ九八終

[illegible]口を引退て攻ざるべし

常山紀談卷之三終